On Makiguchi's Naturalistic Theory of Value –An Examination from the Perspective of Contemporary Metaethics–

Ryo Chonabayashi

Abstract:Tsunesaburo Makiguchi's view that the nature of value can be known empirically is interesting as this idea is now a source of live discussion in contemporary philosophy. In this paper, I explicate Makiguchi's theory in his *Theory of Value* to consider his ideas could be relevant to contemporary debates. My investigation shows that there is a tension between Makiguchi's naturalistic approach to value and the fact that he employed a sort of conceptual analysis in his *Theory of Value*. The overall conclusion is that further research on his views including the examination of his writings on religion may be needed in order to fully understand his naturalism.

牧口常三郎の自然主義的価値理論について

―現代メタ倫理学の視点からの一考察―

蝶名林　亮

1　はじめに

明治から昭和の時代にかけて活躍した牧口常三郎（1871－1944）は、教育者、地理学者、宗教運動家など、様々な顔を持っている。その内の一つに独自の価値理論を提唱した哲学者・思想家としての側面がある。注釈的な研究が多かった当時の日本の哲学界において、牧口のように独自の哲学的理論を提唱するということは珍しいことであった。このことについて中村元は以下のように述べている。

> 西洋思想に対して批判的であった一つの例としてわたくしが感ずるのは、牧口常三郎である・・・わたくしの学生時代から、哲学とは新カント派の『真善美』、あるいは『聖』を付け加えて、価値の体系を立てる。どの哲学者もそのとおり講義していて異論をはさむ者がいなかった・・・それに対して反撃をくらわしたのは牧口常三郎一人だけなのである[1)]

このように、牧口が提唱した価値理論は日本の哲学史において独自の位置を占めているが、彼の価値理論が持っていた特徴的な考えの一つに、価値に関する探究は他の諸科学と同様の経験的探究であるべきだとの主張がある。牧口の

1）中村元『比較思想の軌跡』499－500頁。

このような主張は価値に関する「方法論的自然主義」だと見做すことができる[2)]。方法論的自然主義者は、規範や価値に関する探究といっても何か特別な哲学的探究の仕方があるわけではなく、他の自然科学で用いられているものと原理的には同様の経験的方法によって進められると主張する。牧口の主張はこのような方法論的自然主義の一種であると考えられる。

現代英語圏の倫理学の主要な分野であるメタ倫理学においてこうした自然主義的な主張を巡って様々な論争がある。では、牧口はどのように自身の提唱する自然主義的な価値理論を構築しようとしたのだろうか。本稿では、価値に関する牧口の主要な著作と考えられている『創価教育学体系』第二巻『価値論』を現代メタ倫理学の視点から考察することで、牧口の思想や哲学が現代哲学における論争にどのように貢献し得るのか、考察していく嚆矢としたい。

本稿で行うことは牧口が『価値論』で示した主張や考えを現代哲学の視点から見て理論的に整理することに留まる。たとえば、牧口が価値について考察する上でその理論的な背景としていた可能性が高い当時の経済学と『価値論』の関係や、彼自身が『価値論』と同じ問題を扱っていたと述べている彼の初期の著作である『人生地理学』との関係といった思想史的・歴史的な考察は行わない。その意味で、本稿は牧口価値論の全体的な理解という観点からも、牧口の思想が果たし得る現代哲学における論争への貢献を考える上でも、いまだ十分とは言えない。しかし、上で述べた通り、本稿をそのような考察への文字通りの足掛かりとして位置づけ、今後のさらなる研究のための一里塚としたい。

2　現代メタ倫理学と牧口常三郎の自然主義

2-1　現代メタ倫理学における道徳的性質を巡る論争

現代の英語圏における倫理学では、倫理・道徳に関する探究を大きく二種類に分類する。一つ目は、「どのような振る舞いが悪い行為か」、「人間はどのよう

2）方法論的自然主義についてはRailton 1993の特徴づけに従った。

に生きるべきか」、などの倫理・道徳に関する直接的な問いに答えようとする一階レベルの探究である。これに対して、「嘘をついてはいけない」「人をだますのは悪だ」などの道徳的・規範的判断とはそもそもどのようなものなのか、これらの判断を真にしたり偽にしたりする客観的な道徳的・規範的事実や真である命題があるのか、それともこれらはそもそも真偽を問うことができない感情の表出なのか、といった道徳の二階レベルの探究もある。倫理学において前者のような一階レベルの探究は規範倫理学と呼ばれ、後者の二階レベルの探究はメタ倫理学と呼ばれる。

二十世紀前半のメタ倫理学においては道徳語やそれが含まれる道徳文を巡る意味論的な問題が議論の中心であった。しかし、七十年代に入り、米英両国において、それまで支配的だったR.M.Hareのメタ倫理学説に対する反論がにわかに活発になった。それ以降、メタ倫理学では意味論的な問題だけではなく、道徳に関する形而上学、認識論、道徳心理学に関する問題も中心的に論じられるようになった[3)]。

「悪さ」などの道徳に関する述語によって指されると思われるものを「道徳的性質moral property」と呼ぶことにしよう。このような道徳的性質の形而上学的・存在論的地位に関して、現代のメタ倫理学において主に以下の三つの考えが提案されている。

①道徳的性質は、水溶性、犬、インフレーションなど、様々な経験的科学で探究されている自然的性質の一種であり、何らかの仕方で例化[4)]される（instantiatedもしくはexemplified）。

②道徳的性質は自然的性質とは違う非自然的性質（non-natural property）と呼ぶこ

3）二十世紀におけるメタ倫理学の歴史についてはDancy 2013を参照。

4）例化とはある性質が個別の対象において具現化されることを言う。例えば、「赤い靴、赤い車、赤い鉛筆のそれぞれに共通の赤という性質が例化されている」と言うことができる。

とができるもので、何らかの形で例化される。

③「嘘は悪い」などの道徳判断を真にする道徳的性質は存在しない。

①は道徳的性質に関する自然主義（naturalism）、②は非自然主義（non-naturalism）、③は非実在論（irrealism）と呼ばれる[5)]。①と②は道徳的性質が存在すると主張する点で③と意見を異にするが、その道徳的性質が自然的性質か否かという点では意見が分かれる。

①と②を巡る論争は自然的性質をどのように理解するかという問題も関係してくるが、一つの考え方として自然的性質を以下のように理解することができる。

（自然的性質）

自然的性質は、それが何かによって例化されることが可能であり、かつ、その性質の例化に関する総合的命題（もしくは文）を経験的に知ることができるもの（Copp 2007）

この定義に従うと、水は以下のように自然的性質として特徴づけることができる。水は二つの水素原子と一つの酸素原子を持つという命題は、ある対象に水という性質が例化された場合、その対象は二つの水素原子と一つの酸素原子を持つということを表している。水という概念をいくら分析したところでそこから水素原子や酸素原子に関する概念は出てこない。だから、この命題は分析的命題ではなく、総合的命題であると考えることができる。さらに、この命題

5）非自然主義者の代表的な論者としてShafer-Landau 2003, Wedgwood 2007, Enoch 2011, Parfit 2011などが挙げられる。自然主義の擁護を目指している論者にはSturgeon 1988, 2006, Boyd 1988, Brink 1989, Railton 1986, 1989, Copp 2007, Schroeder 2007が挙げられる。非実在論についてはMackie 1973, Joyce 2001, Kalderon 2005などが擁護を試みている。

の真偽を我々は知覚や観察、実験などの経験的方法によって知ることができる。即ち、水についての実験や観察などを通し、実際に水がこれらの原子の組み合わせでできているのか、知ることができる。故に、その性質に関する総合的命題が経験的に知られるという意味で、水は自然的性質であると理解することができる。

自然主義者は道徳的性質もこのような自然的性質であると主張する。即ち、「ある行為の道徳的悪さはその行為がどれだけ他者を苦しめたかで決まる」などの命題の真偽は、何らかの経験的証拠によって知ることができると自然主義者は主張する。本稿冒頭に「道徳に関する探究は他の科学と同様の経験的手法によって進めることができる」とする方法論的自然主義の主張を紹介したが、方法論的自然主義者はこのような道徳的性質に関する自然主義を受け入れることができる。方法論的自然主義者は価値や規範の探究を経験的方法によって進めることができると主張する。このような主張からは、価値や規範がもし存在するのであればそれは経験的探求の対象であるという結論が導かれるだろう。

自然主義者の「道徳的性質は自然的性質である」との主張は、一見しただけではその真偽を判定することは難しい。果たして、道徳に関する命題を自然科学における探究と同様の経験的方法によって知ることができるのだろうか。自然主義の主張に対して、①を主張する非自然主義者、③を主張する非実在論者双方から、様々な反論が加えられている。非自然主義者は、道徳的性質が自然的性質であった場合、道徳に関する規範性が擁護できないと主張し、非実在論者は他の自然的性質と違い道徳的性質は自然界の中で強固な形而上学的地位を確保できないと主張し、自然主義にそれぞれ反論を加える。歴史的にも、カントは道徳に関する総合的命題は経験的知見によらない方法で、つまりア・プリオリに知ることができると主張しているが、このカントの主張は自然主義への挑戦であると考えることができる。それは、自然主義者は道徳に関する総合的命題はア・プリオリにではなく経験的に知ることができると主張しているからだ。

このように自然主義に対して様々な反論があるが、自然主義に魅力を感じる

哲学者も多く存在し、果たして自然主義が擁護できる立場なのか、今後のさらなる研究が待たれているのが現状である。

2-2　牧口が構想する経験的価値理論

以上、現代メタ倫理学で活発に行われている道徳的性質に関する論争の概略を示した。それでは、牧口常三郎が構想していた価値理論はこのようなメタ倫理学の論争図の中でどのような位置にあるのだろうか。

牧口は彼の教育学を支える価値一般に関する考察として『価値論』を執筆したが、その冒頭で価値を「経験的立場」から論じると述べる。また、価値を「社会学的に考察」するとも述べる[6)]。このような主張は牧口が『価値論』の「序」で以下のように自身の方針と述べていることと一致する。

> （価値問題の研究は）哲学的の研究をといふならばその通りに相違ないけれども、若しそれが経験的立場に於てゞあつて、そしてその研究が可能であるものならば、最早回避すべき理由はなくなると共に遠慮するに及ばぬことゝなろう[7)]

> 思ひ切つて概念哲学の誑惑を脱却し、経験科学を建設するでなければ、何時までも教育の革新は期し難いと思ふまゝに茲に至つた次第である。余は切に実際家の忌憚なき実証的批判を希望するものである[8)]

このように牧口は価値に関する問題は経験的に探究できるものだと考え、価値に関する経験科学の樹立を目指すと述べる。このことから、牧口が構想していたのは現代メタ倫理学で言うところの自然主義的な価値理論であったと理解

6）『牧口常三郎全集』第五巻からの引用は『全集』と略す。『全集』212頁。
7）『全集』208頁。
8）『全集』209頁。

することができる。

牧口がこのような自然主義的な価値理論を構想していたことは注目に値する。前節で述べたとおり、自然主義は現代メタ倫理学において見込みのある立場ではあるが、反対者もおり、議論が分かれている。牧口の構想していた価値理論は議論が分かれている自然主義擁護のための考えや知見を提供し、現代哲学における主要な論争の一つに貢献し得るものなのかもしれない。

先取りして結論を述べると、牧口が『価値論』の中で展開した議論と彼が当初目指していた自然主義的な価値理論の間には一種の緊張関係があると著者は考えている。このことから、もし牧口が本当に意図していたものが当初構想していた徹底した自然主義的価値理論であるならば、『価値論』においてそれはまだ完成していなかったと推論することができる。

ここからさらに推測すると、宗教的現象をも経験的探究の対象であると論じるに至る後期の宗教に関する論文なども参照しなければ、牧口の価値理論の全体像は見えてこないのかもしれない。牧口の自然主義的価値理論の全貌を明らかにするためにはそのような包括的な研究が必要であるが、本稿は以下の論述をそのような研究の足掛かりと位置づけ、『価値論』で示された知見に絞って考察していく。

3　『価値論』における牧口の還元主義的価値理論

牧口が『価値論』においてどのようなメタ倫理学的な見解を想定していたのかという問題は[9]、牧口が価値判断についていくつかの異なる見解を示していることもあり、解釈が難しい問題である[10]。

9）牧口の探究の対象は価値であるが、現代メタ倫理学における探究の対象は価値を含めた規範一般である。価値と規範の関係に関してはいくつかの考え方があるが、両者が密接な関係にあることに反対する論者は少ないだろう。本稿では価値に関するメタ倫理学的探究は規範一般に関する探究に大きな影響を与えるとの想定に立ち、牧口の価値に関する探究に焦点を絞る。

10）例えば、価値判断は冷静に下すことができるものではなく一種の主観的感情の表明であるとの見解を述べている箇所もあれば（『全集』274頁）、人間が何かに関して

3‐1　牧口の価値実在論

この問題に関して、宮田幸一は牧口が『価値論』だけでなく『創価教育学大系概論』など他の論文等でも一貫して価値実在論的な主張をしていることに注目し、牧口の立場は価値実在論（evaluative realism）として理解できると主張する[11)]。宮田は牧口の以下の記述に注目する。

> 悪でも醜でも害でも、それを表現する名に相当する丈けの事実があれば、それは真実であるし、事実でなければ虚偽である。それと同様に善でも美でも利でも、之が表現の事実でないならば虚偽であり、表現通りの事実であるならば真実であつて、此の場合に於ける真偽の概念に毫末も評価[12)]の意味はない。純粋に客観的事実の存非を判定して居る丈けで、主観的感情要素は毫も含まれて居ない。[13)]

この記述によると、悪や醜などに関する判断は真偽が問えるものであるから、ここで牧口が想定しているのは、価値判断は真偽が問える一種の信念であるとする認知主義（cognitivism）である。さらに、価値判断の真偽の判定は客観的事実の有無によるとも主張しているから、ここでの牧口の立場は価値に関する客

価値判断を行うことによりその対象に価値が与えられるという見解を述べている箇所もある（『全集』292頁）。前者が想定しているのは価値判断は真偽を問うことができない感情の表明であるとの一種の情緒主義（emotivism）であり、後者は価値判断によってその判断の対象となったものに価値を与えようとする一種の投影主義（projectivism）だと解釈することができる。

11）宮田『牧口常三郎はカントを超えたか』75‐77頁。

12）牧口はここで悪や醜に関する判断（evaluative judgement）と評価（evaluation）を区別しているように見える。他に牧口は「価値判定」という言葉も使用している（『全集』223頁など）。牧口がこれらの区別を『価値論』や他の著作で意識的に用いているのか、そしてこの区別に訴えて価値判断や規範的判断一般についてどのような理論が構築できるのか、この点に関する研究は後日に譲りたい。

13）『全集』226‐227頁。

観的な事実があるとの価値実在論ということになる[14)]。

3‐2　非還元主義と還元主義

価値実在論は通常二種類に分類される。一つ目は、価値的性質は他の自然的性質、もしくは神に関する性質などの超自然的性質に還元することができない独自のものであるとする立場である。この立場は非還元主義的実在論（non-reductive realism）と呼ばれ、例として本稿第二節で取り上げた非自然主義者がこの立場を取る。

一方、価値的性質を他の性質に還元することができるとする立場もあり、このような立場は還元主義（reductionism）と呼ばれている。ここで言う還元は性質間の同一性として理解することができる。ある二つの性質ＡとＢが同一であるというのは、以下のような場合であると考えられる。

（性質間の同一性）
もし任意の対象ｘがＡという性質を持つのが、必然的に、ｘがＢという性質を持っている場合、かつその場合のみであったとき、ＡとＢは同一である。[15)]

ある対象が水という性質を持つのは、その対象が水素原子二つと酸素原子一つを持っている場合のみである。このことから、水という性質は水素原子二つと酸素原子一つを持つという性質に還元することができる。つまり両者は同一のものであると考えることができる。

このような還元的説明が有益なのは、ある対象について、より詳しい説明を加えることができ、かつ、その対象の本質的な要素が何なのか、明確にできる

14）牧口の価値実在論的な記述としてこの他にも『全集』220頁では価値を発見できる場合があることに言及している。

15）Yablo 1992を参照。

からだと考えられる[16]。水をその構成要素によって説明することは、水の本性を知ることができるという意味で有意味なことであろうし、科学の探究で課題となっていることの一つはこのような還元的な説明を提供することだろう。

価値に関する還元主義者が目指すのも、このような還元主義的な説明の獲得である。即ち、還元主義者は価値を他の性質に還元し、そのことにより、価値に関してより詳しい説明を与えようとしているのである。たとえば還元主義的な功利主義者がいたとして、彼はある行為の悪さをその行為が他者を不幸にする度合いであると主張するかもしれない。これは悪さという道徳的性質を、他者を不幸にする度合いという他の性質に還元するという提案であると見ることができる。この提案は、悪さという内実がわかりにくい観念に実質的な説明を加えているから、価値や規範の内実を明らかにすることを目指す倫理学者にとってそれなりに魅力のあるアプローチである。

3‐3　牧口の還元主義

では、牧口の価値理論はどちらのタイプの実在論に分類されるのだろうか。宮田は、①牧口が価値を目的と手段との関係の中で使用される観念であると考えていたこと、そして、②人々が実際に目的としているのは幸福の実現であると牧口が考えていたこと、この二点に着目し、牧口が還元主義者であったと結論付けている[17]。

16）Aという性質をBという性質に還元できるとすると、AはBによって還元的に説明されるということになるが、ここで示されている説明の実態とはどのようなものだろうか。Aがある場合は常にBもあるのに、なぜAによってBを説明することができないのだろうか（水素原子と酸素原子のことを水によって説明することはできないと思われる）。この問いはメタ倫理学だけに留まらず、現代哲学一般において盛んに論じられている重要な問いである。このような性質間の説明関係についての考察に、近年の形而上学における基礎づけ（grounding）を巡る議論がある。基礎づけを巡る考察の代表的なものに、Rosen 2010, Fine 2012, Schaffer 2009などがある。

17）宮田『牧口常三郎はカントを超えたか』86－88頁。

まず一点目に関してだが、牧口は価値に関する言葉が実際に人々にどのように使われているのかという点に着目する。

> 目的と手段とが観念の対立する場合に於て初めて価値の観念が発生する。目的を達するに都合が好い手段は、この目的に対して価値があるとすることは吾々の日常に普通の事で、人も吾れも無意識に承認し通用するところである。従つて吾人の日常通用する此の語の普遍的意義と断定して殆ど除外例はないことであろうと思われる[18)]。

ここで牧口が述べているのは、通常我々が何かに価値があると考えるのは、それが何かの目的を達成するのに有効な手段である場合であり、このような価値語の使用法は誰もが暗黙裡に認めていることであるから、このような価値語の使用を普遍的な意義とすることができるということである。この引用に続く部分で牧口は次のようにも述べている。

> 人間の必然的運命として（中略）慰安と名づくる精神的糧を必要とする（中略）この目的達成の手段として、対象を求むる時、対象よりうける吾々の影響は美的価値と名づくる概念によって表される実在であるといふより外はないのではあるまいか。其の生存力の伸長を恢復し防禦する慰安として主観の受け取る対象の潜在力を我々は他の語を以て表し得るであろうか。恐らくそれ以外の言葉は現代の社会に於ては用ひられて居ない筈である[19)]。

18）『全集』287頁。

19）同上。この引用部分で牧口は我々の「生存力」を回復するが故に「慰安」に価値があるとする一階レベルの見解も示しているが、これは我々が人間としての生存力をなるべく高めることが我々自身の幸福につながり、ひいては道徳もそのような人間としての完全性によって基礎付けることができるという一種の完全主義（perfectionism）に近い主張と理解できるかもしれない。完全主義はある種の目的論を必要とすると考えられているが、そのような目的論は典型的に自然主義と親和性が低い。その理由は、自然主義的な世界観においては目的論が想定するような人間

これによると、人間が生きていくにあたり適度な休息などが必要だが、この人間が生きていくという目的達成のために休息が持っている力（潜在力）を我々は（美的）価値と呼ぶ。そして、このような手段の有用性を指す言葉として価値語に代わるものは社会の中で用いられていないと牧口は述べる。この箇所でも牧口が主張していることは前の引用と同じことで、①価値に関する観念は目的と手段の関係を考える上であらわれ、手段の有用性を表す観念、または言葉として使われている、②このような使用は社会一般で認められていることであるから、価値をこのように理解することは適切なこと、との二点である。このことから、牧口は価値語をある目的に対する手段としての道具的価値（instrumental value）を表すものとして理解していたと宮田は結論づける[20]。

牧口の価値語に関する分析をこのように理解した場合、牧口のこの考察そのものはにわかに受け入れ難い。上の引用に沿って述べると、人間が生きるという目的とその手段ということを考える場合、まずは人間が生きるとの目的そのものに何らかの価値があり、そしてそのような価値ある目的を達するのに役立つものであるが故に、様々な手段も価値を持つと考えるのが一般的であろう。あることに目的としての価値があることを現代の価値を巡る議論ではしばしば「究極的価値（final value）」を持つと表現するが、そのような究極的価値が想定されていなければ、どのような対象も道具的価値を持ちようがないとも考えられる[21]。ここではこの問題については深入りをせず、宮田の分析に従って牧口が価値語の使用は一般的に道具的使用に関するものであると考えていたと想定し、

が特有に持っている目的などを想定する必要がないと考えられているからである。牧口の一階レベルでの見解がこのような完全主義であった場合、彼の目指した二階レベルでの自然主義と衝突する可能性も考えられる。

20）宮田『牧口常三郎はカントを超えたか』86頁。宮田はinstrumental valueの訳語として「手段的価値」との用語を用いているが、現在では「道具的価値」と呼ぶ方が一般的であるので本稿では後者を用いる。牧口は『価値論』の他の箇所でも（『全集』226頁など）価値を手段が目的に対して持つものであるとの考えを示唆している。

21）究極的価値と道具的価値、そして関連する内在的価値（intrinsic value）と外在的価値（extrinsic value）の分類に関してはKorsgaard 1983を参照。

まずは牧口がこの想定からどのように価値の還元主義に至るのか見ていく[22]。

価値の還元主義を提示するにあたり牧口が主張するもう一つの点は、人々が目的としていることは幸福であるということだ。牧口は「人生は畢竟価値の追求である。その価値の獲得実現の理想的生活は幸福である」[23] と述べているが、これは人々が実際に目的としていることは価値の追求であり、その価値が理想的に獲得された状態を幸福とすることができるとの主張だ。これらの主張は牧口の価値や幸福に関する一階レベルの主張だが、「価値の獲得と幸福の実現にはどのような関係があるのか」、「人生に絶望している人も価値の獲得を実際に目指していると言えるのか」、などの細かい議論に立ち入ることなく、牧口が「人間は実際に理想的な価値の獲得である幸福を目指している」との主張をしていることだけを確認して、議論を進める。

以上、牧口が①価値語に関する通常の使用方法に着目して価値を道具的価値と考えていたこと、②実際に人々が目的としていることは幸福であると考えていたこと、この二点について説明したが、ここから牧口の価値に関する還元主義的な理論が導き出される。まず①によると、「ｘは良い」という主張は、「ｘ

22）牧口は本当に価値を道具的価値としてしか理解していなかったのだろうか。牧口は美・利・善という価値に関する一階理論も提示しているが、彼がある特定の対象、もしくは状態に価値があると主張していることは、それらに一種の内在的価値（intrinsic value）を認めていると考えるのが自然であろう。

　このように考えてくると、牧口が究極的価値・道具的価値・内在的価値・外在的価値についてどのように考えていたのか、もしくは牧口が示した価値理論の枠組みからするとこれらの異なる価値に関してどのようなことが言えるのか、さらなる検討が必要なのかもしれない。特に自然主義者が究極的価値や内在的価値をどのように捉えることができるのかという問いは哲学一般においても様々に意見が分かれているから、牧口価値理論からどのようなことが言えるのか、意義ある研究が期待できる。この研究課題については後日に譲ることとしたい。

23）『全集』390頁。『創価教育学体系』第一巻においても牧口は「幸福以上に人生の理想はあるであろうか。幸福以外にもしも人生の理想があるとせばそれは何か。恐らくはそれは幸福概念が包含する内容の見解の相違するによつて現はれたものではないか。若くは幸福の要素又は部分を全体と誤解するに基づくものではないか」（『全集』127頁）と述べている。

は何かの目的達成のために有用である」という主張と同義であるということになる。そして、②を考慮にいれつつ、ｘに入るのが任意の行為のタイプであると想定すると、「ｘ（ある行為のタイプ）は良い」の内実は「ｘは幸福の実現のために有用である」ということになる。これは、良いという価値的性質を幸福実現のための有用性と同一のものとする価値に関する還元的な提案である。牧口の価値理論をこのように理解すると、牧口の価値理論は一種の還元主義であったと理解することができる[24)]。

4　分析的還元主義か、総合的還元主義か

前節で牧口の価値理論が一種の還元主義であることを示したが、価値を他の自然的性質に還元するという戦略にも、異なる二種の立場がある。

4-1　分析的還元主義と総合的還元主義

一つ目は分析的還元主義（analytic reductionism）と呼ばれる立場だ。この立場によると、価値的性質が還元される自然的性質は、価値語の意味に関する概念分析（conceptual analysis）を行うことで知ることができる。ここで言う概念分析とは、知覚、観察、実験などの経験的方法を使うことなく、ある概念に関する理解に基づいてその概念が含意している違う概念を導き出すという作業である。三角形という概念について考えてみると、もし三角形の概念が正しく理解されていた場合、我々はここから三角形が三つの辺を持つ多角形であることを、経験的方法を使うことなく、つまりア・プリオリに知ることができると思われる。分析的還元主義者は価値についてもこのような概念分析を行うことで、価値がど

24）ある性質を他の性質に還元することで前者に関する概念や言葉の使用を放棄することを主張する消去主義（eliminativism）と、このような還元は前者の形而上学的・存在論的地位を強固にするものだとする立証的還元主義（vidicative reductionism）があるが、牧口の理論は後者に属すると思われる。還元主義に関するこの区別に関してはRailton 1989を参照。

のような自然的性質に還元されるのか、示すことができると考えている。

価値に関する概念分析とは実際にどのような作業なのだろうか。価値の探究における概念分析の使用に好意的な態度を取る論者たちは、ある価値概念に関する概念分析はその概念を運用するために必要なあらゆる常識的な見解（platitudes）について把握することであると提案する[25)]。この提案に従ってみると、良いという価値概念の概念分析を行うことは、この概念の運用に必要なあらゆる常識的な見解を把握するということだ。ここでいう概念の運用とは、対応する用語が通常使われる仕方と考えることができる。例えば、ある対象について良いとの判断を下すことは、少なくともその対象を好む傾向性を持つということであろう[26)]。もし価値の概念分析においてこのような事実が示されていない場合、その分析は価値概念運用に必要な常識的な見解を捉えそこなっているということになり、不十分なものと見なされる。たしかに、このような仕方で価値の概念分析を行っていけば、最終的に価値に関する整合的な理論を構築することができ、そこから価値がどの性質に還元されるのか、示すことができるかもしれない。

このような分析的還元主義とは違う仕方で価値的性質の還元を目指すのが総合的還元主義（synthetic reductionism）と呼ばれる立場だ。この立場を擁護する論者たちは、概念分析だけでは価値の実態を知ることはできないと考えている。その上で、水が水素原子と酸素原子に還元できることが経験的に知られたように、価値的性質も経験的方法によってどのような性質に還元されるのか知ることができると主張する。

ではどのようにして価値的性質の実態を経験的方法によって知ることができるのだろうか。この問いに対して、総合的還元主義者は、人類が自分たちの幸福に何が必要か徐々にその理解を深めていった歴史に訴えることができるかも

25）価値探究における概念分析のこのような理解についてはSmith 1994, Jackson 1997を参照。

26）Smith 1994, p. 39.

しれない[27]。社会科学も含めた諸科学が経験的に発展していくことで、我々はある程度の幸福感を維持して健康に生きていくためには何が必要なのか、わかるようになってきた。例えば、古代人でも何かを食べなければ生きていけないことは知っていたと思われるが、栄養学が発達した現代においてはどのようなものをどの程度食べれば健康に生きていける確率が高くなるのか、古代人が持ちえなかったある程度信頼できる知識を我々は持っている。このことは、人間にとってどのような食生活をとることが良いことなのか、そのことが経験的に把握されるようになってきたことを示している。そして、このような価値に関する経験的探究を重ねていくことで、良いという性質が最終的にどのような性質に還元されるのか、明らかにすることもできるのかもしれない。

分析的還元主義と総合的還元主義の間には価値探究の仕方に関する見解に大きな違いがある。分析的還元主義者は、価値語がどのように使われているのかを検討し、そこから価値的性質がどの自然的性質に還元されるか考察するから、彼らの焦点は「言語」である。また、分析的還元主義者はある言葉の意味はそれが運用される時に想定されている概念と同じであるという想定もしている。このような想定に立ち、分析的還元主義者は価値語が運用されている時に我々が想定している概念を分析することが価値語の意味に関する正しい分析であると考えている。一方で、総合的還元主義者は価値語に関する概念分析のみで価値に関する正しい説明を与えることはできないと考えている。むしろ、価値語が指していると思われる価値的性質の形而上学的、存在論的地位について直接考察を加えることで、価値の実態の解明を試みる。彼らのアプローチは言語に焦点を当てたものではなく、価値的性質に関する直接的な考察を試みるものという意味で「形而上学的」なものであると言える。

27）Boyd 1988, p. 207.

4-2　牧口は分析的還元主義者であったか？

では、牧口の価値理論はどちらのタイプの還元主義であったのだろうか。牧口の価値理論の特徴を考えてみると、少なくとも『価値論』において示されている理論は、分析的還元主義の一種であったと考えられる。

その理由は、牧口が実際の道徳語の使用方法から価値の「普遍的意義」を導き出して価値の還元を行っている点にある。牧口が提案している価値語の意味を明らかにする方法は、現代の分析的還元主義者らが提案している概念分析の方法に近いものである。牧口は価値語が通常どのように使用されているのか検討し、そこから価値語の意味は道具的価値であると結論づけた。これは、価値語が使用される際に想定されている一般的な見解を把握して価値概念の分析を行う分析的還元主義の方法と基本的に同じである。つまり、牧口が価値語の使用方法からその普遍的意義を導き出そうとしているのは、彼が一種の概念分析を試みていたということである。

牧口の価値理論に関するこのような解釈と整合性のとれない箇所も『価値論』にはある。例えば、牧口は価値を測定可能なものであるとして、経験的方法によってその実態を知ることができる主張している箇所もある。次の引用はその例である。

> 価値は斯かる主知的の作用だけでは証明することが出来ない、元来対象と評価主観との関係力の代表なるを以つて、関係対象に対する反響力の実験によつて証明するより外に方法のない[28)]

ここで牧口はある対象が主観に対してどれだけの価値を持つかどうかはある種の実験によって明らかにされると述べている。この箇所を見ると、牧口は価値の実態を知るには概念分析ではなく何らかの実験、つまり経験的方法を用い

---

28)『全集』229頁。

る必要があることを示唆している。同様に、価値は経験によって認識することができると牧口が述べている箇所もある[29]。これらの箇所は、牧口が分析的還元主義ではなくむしろ総合的還元主義を想定していたことを示唆する。

だが、価値語の実際の社会における使用方法を検討してそこから言葉の意味を分析していくという牧口の概念分析の手法は、価値語の意味を道具的価値としている箇所だけでなく、価値に対しさらに実質的な分析を試みている次の箇所でも見られる。

> 価値の概念を明にするには吾々の社会に通用して居る価値といふ詞の意味を吟味するのが唯一の近途である（中略）此の語の最も早くから用ひられたのは経済的な意味に於てゞあろう。価値即ち「ねうち」のあると云ふことは、慾望充足の対象とするに足ると云ふことである。此処に一枚の着物があり、それが非常に汚れて居たと仮定すると、富豪の人達には何等慾望充足の対象とはならないから価値を持たない存在である。しかし子沢山の貧困者には大いなる価値を持つ存在である。此の様に価値は慾望充足の対象として評価主体との関係を表す意味に使用される。即ち其の対象が存在することによつて我々の慾望を満足させることの出来ることを吾人は「値うち」があると云ふのである[30]

この箇所での牧口の結論は「もし対象 x に価値があるならば、x は少なくとも誰かの欲望を充たすものである」という価値に関する実質的な主張である。牧口がこの結論に至るために訴えるのは、社会一般で通用している「値うち」という言葉の使用に関する事実である。即ち、牧口は、少なくともそれによって誰かの欲望を充たすことができるものを人々は「値うち」があると呼んでいるという事実に訴えて、「値うち」があるもの、即ち「価値」があるものは、それによって少なくとも誰かの欲望が充たされるものであると結論づけている。

29)「善にあらざる利を吾々は経験し認識し得る」、『全集』226頁。
30)『全集』128頁。

牧口は「通俗に用ひられて居る価値の概念—それこそ本来の意味」[31] とも述べているから、牧口が用いた方法は価値語が一般的にどのように使用されるか分析してそこから価値の実態を明らかにしようとする概念分析の一種であったと理解することは妥当なことだろう[32]。

これらのことから、『価値論』において牧口が実際に行おうとしていることは一種の概念分析であり、そこで想定される立場は分析的還元主義であったと考えることは妥当なことだろう。

5　牧口の自然主義的価値理論と分析的還元主義の間の溝：今後の牧口価値理論研究へ向けて

前節で、牧口が『価値論』で示した理論は一種の分析的還元主義であったと論じたが、この結論にはいくつかの含意がある。

その一つは牧口が提案した概念分析の方法は現代メタ倫理学においても一定の支持を得ている方法に近いものであり、牧口の戦略はある程度見込みがあるものだったと考えることができるということだ。牧口は大学などに所属している研究者ではなかったが、牧口がこれほどの質を備えたメタ倫理学理論を構想できたことは、牧口が価値の探究に関して優れた力量を持ち合わせていたことの証左といえるだろう。

そしてもう一つの大事な含意は、牧口が当初目指した自然主義的価値理論と分析的還元主義の間には重大な溝があるということだ。このことは、『価値論』当時における牧口の理論に内的不整合があったことを伺わせる。

牧口が当初構想していたことは、経験科学の一分野として価値理論を構築することであったが、このことは本稿の冒頭で述べたように、価値の性質は経験的探究によって明らかにすることができるという自然主義的な考えを含意していた。この自然主義的な考えは、価値に関して以下のような含意を含んでいる。

31）『全集』47頁。

32）牧口が概念分析を用いて価値の実態を明らかにしようと試みていると見られる他の例には、『全集』128頁、217頁、219頁、289頁、309頁などがある。

①価値に関する知識は経験的知識である

②価値の実態は我々が価値語をどのように使用しているかどうか知るだけでは把握することはできない。価値に関する知識は、他の科学と同じように、蓄積的に進歩していく。

分析的還元主義はこの二つの考えと衝突すると考えられる。まず①だが、分析的還元主義が提案しているのは、価値に関する還元を観察や実験などの経験的方法に頼らない一種の概念分析によって行うというものだ。となると、分析的還元主義は①を受け入れることはできない。

また②を巡っても自然主義と分析的還元主義は対立すると思われる。分析的還元主義によると、価値がどのような他の性質に還元できるかは、我々が価値語をどのように使用しているのか分析することで知ることができる。この説によると、もし我々が価値語を「なるべく多くの人の幸せに貢献することが良いこと」という意味で使っていることが概念分析によって示されれば、価値的性質は多くの人の幸せへの貢献ということに還元されることになる。だが自然主義者はこのような結論を受け入れられない。というのも、自然主義者は価値に関する事実は我々が現在価値語をどのように使用しているかによって決まるものではないと考えているからだ。「水」という言葉がどのように使用されているのかいくら探究したところで、水が水素原子二つと酸素原子一つから成り立っていることはわからない。水の実態を知るためには観察・実験を通して水の性質について徐々に知っていくしかない。自然主義者は価値的性質も同じような特徴を持っていると考えている。即ち、価値語が現在どのように使われているのか、その常識的な見解をいくら集めたところで、価値の実態はわからない。価値の実態を明らかにするためには、価値に関して様々な経験的な角度から探究するしかないと自然主義者は考えている。このことは、自然主義者が価値に関する知識は経験的方法によって徐々に蓄積的に進歩していくと考えていることにもつながる。

このように考えると、牧口が当初目指していた自然主義と、牧口が実際に『価

値論』の中で示した分析的還元主義の間には隔たりがあるように思える。この隔たりについて、どのように考えればよいのだろうか。

『価値論』における内的不整合について、一つの仮説として考えられるのは牧口の自然主義的価値理論は『価値論』の時点では未だに完成していなかったということだ。このように考えると、牧口の価値論の全体像を見るには、『価値論』以外の他の著作も考慮にいれて、牧口がどのようにその自然主義的な価値理論を完成させていったのか、検討する必要が出てくる。特に、牧口が『創価教育学体系』の後に執筆した論文「科学と宗教との関係を論ず」(1936年)や『創価教育法の科学的超宗教的実験証明』(1937年)などは、宗教と価値の関係について論じつつ価値科学がどのように成立し得るのか論じている著作であり、牧口が構想していた価値理論の全体像を把握するためには検討しなければならないものだろう。このように考えると、今後の牧口価値理論の研究においては、『価値論』にだけ焦点を当てるのではなく、これらの後期宗教論文なども視野に入れた包括的な研究が必要となってくると思われる。

6　結び

本稿では『価値論』における牧口の主張を現代メタ倫理学の視点から検討し、牧口が当初目指していた自然主義と『価値論』において実際に想定されている立場には緊張関係があることを示した。この結論から、牧口の思想は『価値論』時点においてはまだ発展段階にあり、その全貌解明のためには後期宗教論文なども含めた包括的な研究が必要であると推測できる。それが現代の論争にどのような貢献をするのか考察していくことは有益なことであり、さらなる今後の研究が必要であろう[33)]。

---

33) 本稿の作成に際して、石神豊、吉良貴之、永守伸年の各氏より、有益なコメントを頂いた。また東洋哲学研究所2015年9月度研究部員会において本稿に関する発表を行った際も参加者より有益なコメントを頂いた。この場を借りて感謝申し上げる。

使用文献一覧

中村元『比較思想の軌跡』東京書籍　1993年
牧口常三郎『牧口常三郎全集』第五巻　第三文明社　1982年
宮田幸一『牧口常三郎はカントを超えたか』第三文明社　1997年

Boyd, R. 1988: 'How to be a moral realist', in Sayre-McCord (ed), E*ssays on Moral Realism*. Ithaca: Cornell University Press.

Brink, D. 1989: M*oral Realism and the Foundations of Ethics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Copp, D. 2007: M*orality in a Natural World*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dancy, J. 2013: 'Meta-Ethics in the Twentieth Century', in Beaney (ed), T*he Oxford Handbook of the History of Analytic Philosophy*. Oxford: Oxford University Press.

Enoch, D. 2011: T*aking Morality Seriously*. Oxford: Oxford University Press.

Fine, K. 2012; 'Guide to Ground', in Correia and Schnieder (eds), M*etaphysical Grounding*. Cambridge: Cambridge University Press.

Jackson, F. 1998: F*rom Metaphysics to Ethics*. Oxford: Oxford University Press.

Joyce, R. 2001: T*he Myth of Morality*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kalderon, M. 2005: M*oral Fictionalism*. Oxford: Clarendon Press.

Korsgaard, C. 1983: 'Two Distinctions in Goodness', P*hilosophical Review* 92.

Mackie, J: E*thics: Inventing Right and Wrong*. London: Penguin.

Parfit, D. 2011: O*n What Matters vol.2*. Oxford: Oxford University Press.

Railton, P. 1986: 'Moral Realism', P*hilosophical Review* 95.

Railton, P. 1989: 'Naturalism and prescriptivity', S*ocial Philosophy and Policy* 7.

Railton, P. 1993: 'Reply to David Wiggins', in Haldane and Wright (eds), *Reality, Representation and Projection*. Oxford: Oxford University Press.

Rosen, G. 2010: 'Metaphysical Dependence: Grounding and Reduction', in Hale and Hoffmann (eds), M*odality: Metaphysics, Logic and Epistemology*. Oxford: Oxford University Press.

Schaffer, J. 2009: 'On what grounds what', in Manley, Chalmers and Wasserman (eds), M*etametaphysics: New Essays on the Foundations of Ontology*. Oxford: Oxford University Press.

Schroeder, M. 2007: S*laves of the Passions*. Oxford: Oxford University Press.

Shafer-Landau, R. 2003: M*oral Realism*. Oxford: Oxford University Press.

Smith, M. 1994: T*he Moral Problem*. Oxford: Blackwell.

Sturgeon, N. 1988: 'Moral Explanations', in Sayre-McCord (ed), E*ssays on Moral Realism*. Ithaca: Cornell University Press.

Sturgeon, N. 2006: 'Moral Explanations Defended', in Dreier (ed), C*ontemporary Debates in Moral Theory*. Oxford: Blackwell.

Wedgwood, R. 2007: T*he Nature of Normativity*. Oxford: Oxford University Press.
Yablo, S. 1992: ‘Mental Causation’, P*hilosophical Review* 101.